

中国における災害の記念・記憶のモデル —唐山地震を例として— Memories and Memorial Patterns of China's Disaster -Taking the Tangshan Earthquake as an Example-

王 輯予¹
Wang Jiyu

¹ 関西大学社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻博士後期課程
The Graduate School of Sociology, Department of Mass Communication Studies, Kansai University

要旨…現代中国における災害の記念、記憶方法がどのように取り扱われてきたのか、さらに、マスメディアは政治指令と自発的活動の狭間で、どのように記憶を忘却あるいは復活したのかについて明らかにしたい。

キーワード 記念・記憶、唐山地震、周年報道、メディア

1. はじめに

(1) 問題と事例

1976年7月28日3時42分53秒、文化大革命という激的な政治変動期を経験していた中国の唐山地区は、M7.8の直下型地震が起き、242,769人が亡くなった。地震10年後の1986年は、唐山地震の現地救援者であった銭鋼は自分の経験に基づき、『唐山大地震』というノンフィクションを発表した。さらに、地震の32年後の2010年に、映画『唐山大地震』が公開された。唐山地震に関するイメージはこの二作から得た人が多く、一方、新聞紙・ラジオなどの伝統メディアからの唐山の災害に関する情報は不完全なままである。

本報告は唐山地震以降の周年記念報道を巡り、メディア（伝統メディアとネットメディア）が、どのように災害を取り扱い、個人的体験をいかに集合的記憶に形成し、継承してきたのか、明らかにしたい。

唐山地震の事例を通し、中国社会は災害という「負の遺産」をどのように認識しているのか、現在の中国社会の災害の記念の特徴、特にメディアの表現を整理し分析する。

(2) 先行研究

「記念」についての研究は非常に少なく、共産党の記念日、記念館などに集中し、記念活動の過程の記述が主要な内容であったが、胡国勝は中国共産党史に着目し、政治的儀式としての共産党の記念活動を考察し、記念の経験と意義を論述した（胡2008:39）。彼が検討した政府による記念活動の効用、つまり政治効用（権威の強化、形象の構築、政治的参与）、社会効用（ナショナルの構築、共同体の強化、社会認識の獲得）、文化効用（イデオロギーの宣伝、社会記憶の形成、教化教育）と、後述の災害に関するマスメディアによる記念活動の報道の効用と比較することが必要であろう。

「集合的記憶」¹に関して、歴史事件を通じ、ある共同体の記憶およびアイデンティティの構築への影響などについての論述は多い。「文化大革命」「南京事件」などの歴史的な事件を述べる際に、記念館などの施設に保存された公共的記憶を離れ、夥しい個人的記憶は、より具体的、真実的であっても、公共的・集合的記憶になり難い。つまり具体的事件を抽象的数字などに簡易化する過程での「記憶の暗殺者」の存在が指摘される。「国家政治だけでなく、教科書の冷たい記述、学者の「客観公正的」研究なども、記憶を抽象的に概括しながらまとめているので、「記憶の暗殺者」である」というのだ（王・劉 2006:50）。さらに、薛亜利が述べた「中国の国家祝典とオリンピック大会などのセレモニーは、血縁と地縁関係が弱まっている現代の中国人に、団結的精神力を提供する同時に、この社会の一員としてのアイデンティティも認めさせた」とする（薛 2010:70）。本報告が論じた災害の記念も一種のセレモニーのように、メディアを通し、共同体のアイデンティティを構築してきた。

この過程について、伝統的マスメディアは「断裂と連続」「再構築、隠蔽と強調」（周 2014：41）という機能を果たしているが、ネットメディアは普通の人間の集合的記憶を書きあげる可能性を提供し、「権力的」集合的記憶の記述法と異なる方法を形成しつつあると論じられている（胡 2014：101）。

唐山地震の記念の方法について、王晓葵は「国家権力が公共記念空間の構築、公祭と記念行事の開催及び一部の個人体験談の「徴用」によって、この大規模災害の記録と記憶を固定化する」と指摘した（王 2007：145）。王によれば、記念碑と記念館という空間においては、地震がもたらした傷とその傷の癒しの表現が弱いのに対して、政府、党による救災の功績は強調されていると同時に、メディアが掲載する被災者の記憶は、「災害への遭遇→救命→感謝」というモデルに従った。このようなモデルは20年ほど継続されてきた。記念碑広場が建設されてから、追悼の意味だけではなく、政治的、娯楽的な意味が付与され、過去の震災に関する記憶が喚起された。一方で、日常的活動や時間の経過によって、記憶の内容も絶えず書き直されると、王は指摘する（王 2008：10）。

一方、数少ない災害に関する記憶研究の中で、王晓葵は唐山地震・四川地震などの事例に基づいて、記憶の空間を巡って検討しているが、メディアが災害に関する記憶を抽象化しながら再構築する過程の検証はなされていない。

(3) 唐山地震の記憶に関する社会的背景

① 唐山地震は中国にとっての政治的変動期に起こった。国家の主席と副主席が相次ぎ死去し、政治を長期に左右する「四人組」が打倒された。この年を境に、中国は政治と経済の構造は大きく変わろうとしていた。唐山地震はある意味で、中国の改革の契機となり、唐山復興の十年は、社会環境の安定、経済の解放、政治政策の「経済建設を中心」への移行の十年であった。唐山地震以降、地震に損害された他地域、例えば、北京、天津などの都市は、現代的都市に向け、大規模な土木工事を行ったと言えるだろう。

唐山地震は、中国の政治、経済、文化などという全体の行方を問いかける時期に起きた出来事として重大な意味を持つと考えられる。

② 中華人民共和国成立後、1966年河北省邢台地区の二回の地震（M6.8/M7.2、死者合計8064人）や、1970年雲南省通海県地震（M7.7、死者15621人）、1975年遼寧省海城県地震（M7.3、死者1328人）という大地震が発生したが、建国初期、あるいは遠隔地で発生したために忘却された。唐山地震の結果、中国初めての「地震社会学」²が誕生した。ただ、唐山地震以降、最も強調されたのは防災減災問題ではなく、災害を抵抗する「抗震精神」が創造した都市建設の「奇跡」である。

③ 学校教育において、現在、中国の高校教育では7つの出版社の教科書が採用されているが、そのうち、語文出版社の国語教科書³のみで、銭鋼が書いたノンフィクション作品——『唐山大地震』の抄録は掲載されている。一方、小学校教育では、人民教育出版社の国語教科書に、ロサンゼルス地震における親子感情⁴と、アルジェリア地震での中国国際援助隊の支援⁵を描写するテキストは二篇があるが、唐山地震についての記述はない。唐山地震についての情報とイメージの普及は、これらの教科書以上に、後述の2010年の映画『唐山大地震』の公開が大きな役割を果たした。

(4) 分析方法

- ・中国における災害に関する社会学的研究をレビューし、災害の記憶および唐山地震の位置を把握。
- ・唐山地震についての『人民日報』とネットメディアの周年報道を分析し、変容の内容を分析。
- ・映画『唐山大地震』の内容分析を通し、伝統メディアの補足作用の分析。

2. 唐山地震の周年記念報道——マスメディアの記憶

40年前の地震について、その記憶が喚起される契機は、ほぼ十年を単位とする周年記念である。しかし、インターネットの普及により、伝統メディアの従来の「お祝い」のような報道と、ネットメディアの哀悼を強調する二つのパターンが見られるようになった。

(1) 伝統メディアが伝える記念の主体——「新型都市」と「抗震精神」

唐山地震を本格的に記念したのは、地震の十年後からである。この時の唐山は、被災された都市より、「新唐山」という都市建設モデルとして表現されていた。周年の際に、伝統メディアは唐山並びに唐山地震を以下のキーワードで展開し、さらに最も強調された「新型都市」「抗震精神」の特徴を記す。（表1）

表1：『人民日報』における唐山地震の記事キーワード⁶

	新型都市	抗震精神の記念	防災・減災関連	地震の記念	哀悼	体験・記憶
記事数	9	8	7	2	1	1

▽ 新型都市

唐山市は「鳳凰再生の地」として描かれ、「可哀そうな歌を歌っていく、嬉しい歌を歌って帰る」⁷と比喻された。被災した唐山の描写モデルは「過去のきれいな都市は一瞬にしてなくなったが、党・国家の指示により、解放軍の協力により、本日の新たな唐山市がより立派に復興された」ということに概括される。以下のような描写は、唐山市についての内容によく見られる。具体的には巨大な「都市変化」に注目し、災害があるからこそ「飛躍的な都市発展」があるという意味である。

唐山人のアルバムを見れば、震災前の「黒い煙白い煙が空に満ちた」の百年の城が白黒写真に写っている。その代わりに、色写真に描かれたのは、優雅に街を照らし、電信が発達し、基礎施設が整っている新たな唐山市である。壊滅・十年の復興、十年の振興を経過した後、唐山は過去より高い都市機能を持つようになった。⁸

▽ 「抗震精神」の変容

① 1986年の唐山地震十周年——「抗震」十周年を記念

唐山地震十周年の際には、「抗震」を盛大に記念した。「最短の時間で思念を述べ、最大な努力で苦痛を洗い落とす」⁹という「大きな進歩」があり、新型都市が建設された。「改革開放」制度の優越性を表現する意図が伺える。この時期に強調されたのは、「艰苦奋斗，团结抗震」¹⁰（必死に努力して、団結して地震と戦う）という精神である。

② 1996年の唐山地震二十周年——「抗震精神」の定義

党総書記江沢民により、「公而忘私」「患难与共」「百折不挠」「勇往直前」¹¹（公のために尽くして、私事を忘れる；危険と困難を共に担う；何度挫折してもくじけなく、不撓不屈である；勇敢にまっしぐらに前進する）という内容に概括される。その結果、「公」と「共」としての英雄的解放軍、勇敢的人民たちおよび賢明な党の指揮が記憶の主体となった。

③ 2006年の唐山地震三十周年と2008年の四川地震——「抗震救灾精神」の再定義

唐山地震三十周年に、中央組織は災害を大規模に記念し、伝統メディアは、中央だけでなく地方も大量の民間記憶を発掘した。防災・減災についての内容も多く言及されたが¹²、地震についての哀悼、そして地震そのものの記念、フィードバックは、ネット投稿からのものがわずかに存在するだけである。

なお、2008年四川地震に、党総書記胡錦濤は「抗震救灾精神」を追加し、「万众一心，众志成城；不畏艰险，百折不挠；以人为本，尊重科学」¹³（衆人の心が同一目標に向かい、衆人の志を合わせて、鉄壁の城になれる；困難や危険を恐れなく、何度折り曲げても折れない；人間本位で、科学を尊重する）とした。愛国主義と集団主義的内容も相変わらず強調されたが、唐山地震直後の「人定勝天」¹⁴精神からの展開も見られる。

④ 2016年の唐山地震四十周年——「抗震精神」から「中国梦」まで

地震四十周年に、習近平は「抗震精神」を「中華民族精神」「中国梦」¹⁵の中で充実させた。「抗震精神」という少数者の被災体験によって形成されてきた精神は、中華民族のものになり、「中華夢」という実際の国家目標（小康社会の建設と民族復興）を達成するための精神力になったと主張した。記事の見出しから見れば、以前のような「唐山抗震救灾」「記念XX周年」などの用語は見えず、「習近平唐山考察」「習近平の唐山の八時間」「唐山四十年」などで表現した。

▽ 小括

この「新型都市——唐山」の「抗震精神」は、10周年の時に「唐山地震」を代表し強調され、次第に改造され、40周年の際に「唐山」ではなく「中華民族精神」までになっている。地震および地震の細部が忘却される代わりに、地震の記憶は「変形し

たり、凝ったりするうちに、民族的・時代的災害の記憶¹⁶⁾になり、巨大な「国家権力に主導された記念」として表現された(王 2008 : 19)。

(2) ネットメディアと映画における記念——ミクロな視線

宣伝機関としての伝統メディアは、党の優越性を避けて客観的に現実を記録することは難しい。党は「われわれ」という党集団像を作り、この集団に属する個人をピックアップしつつ、その一方で集団から離れた個別的記憶あるいは個人のような単位を忘却した。これらの「忘却された」個人と家族は、ネットメディアよりピックアップされた。(表2)

記念活動を行うネットメディアは性質から見れば、二種類がある。「新華網」「人民網」などは国家通信社、報道機関などに所属するニュースサービスサイトであり、報道方針は国家の宣伝方向に従う¹⁷⁾。「新浪」「網易」などはニュースサービスなどを含める総合的ネット会社(新メディア)であり、報道は自由度が高く、国家のメディアサイトより迅速である。

表2：ネットの特集記事のまとめ(2016年7月28日)

サイト	記念の方式	表現の内容	まとめ
新華網	生放送、ユーザーとのリアルタイムでコミュニケーション；VR技術で唐山市の変化を見させ、「新唐山」を体験する。	「地震の記憶」 被災 救援、援助 感謝 「復興の成果」：過去と現在(写真)	伝統メディアのニュースサイト： 地震——救援——復興——成果 「マクロ的展示・叙述」
人民網	記事と写真報道で、唐山40年の発展と変化；経験者の体験談で地震を顧みる	「防災知識の普及」	
新浪網 (sina)	個人体験の記事、写真、ビデオ、インタビューを通して、地震が人間と都市へもたらした影響を再呈示する	「哀悼」「追悼」→「記念」 例：澎湃ニュース ¹⁸⁾ (口述) 被災者、医療チーム、解放軍、史学	新メディア：旧写真、インタビュー、経験者の口述・記述 「ミクロ的体験」
騰訊網 (tencent)	写真集で唐山の変化を呈示する；ビデオのシリーズで唐山の記念活動を記録する	研究者、唐山の計画建設者など	
網易 (163)	写真集で記念活動を記録する；哀悼 吊いの特集を作成		
澎湃 (the paper)	口述記録		

こうして、伝統的マスメディアによる記憶に加え、映画『唐山大地震』(表3)の個人的記憶(娘：被災→恨み→許し；母：被災→過去の記憶に生きている→未来に向かう)が加わることで、伝統メディアの叙述モデル(災害への遭遇→救命→感謝)一色の情報環境に変化が見られ、より複雑なストーリーが加わることで権力的記憶モデルを「補足」することとなった。メディアの広がりによって、中国社会の災害に関する記憶と記録パターンの複線化も生まれてきたと言えよう。

表3：映画『唐山大地震』の紹介と伝統メディアとの比較

映画	『唐山大地震』
上映年月	2010年
興行収入	6億6505万4300円(史上最高)
あらすじ	1976年7月28日、M7.8の大地震が中国の唐山市を襲う。姉弟の一人しか救えない状況で、母親は断腸の思いで息子を選ぶ。しかし奇跡的に娘は命を取り留めており、彼女は養父母のもとですくすくと育っていた。数年後、唐山で暮らす母と一緒に住もうという息子の提案に、拒絶する。娘は、妊娠し子を産んでしまった自分

	を恥じて戻れなかった事、そしてずっと心の奥にしまっていた唐山大地震の事、母の選択の事を養父に打ち明ける。2008年5月12日、四川を大地震が襲う。カナダ人と結婚し海外で生活していた娘、そしてビジネスに成功していた息子はボランティアとして四川へ向かう事を決断する
特徴的なシーン	「われわれの体験者」の唐山地震、個人の遭遇 毛沢東の死後（1976年）と復興後（1986年）の改革開放年代、個人の成長と心の辿り道 四川地震（2008年）、個人の共感
伝統メディアとの共通点	・地震の場面、自救、大量の孤児、解放軍の救助 ・中国の発展と変化、党の優越性を表現 ・都市の「全滅」が分かりにくい ・地震による社会問題（救助の過程、治安問題、生活問題など）が不明（鄒 2012：148）
伝統メディアとの差異	・地震前の幸福とその後の壊滅 ・地震をリアル化 ・党のゆえに、個人の粘り強さを表現 ・ある家庭の三十二年の軌跡を表現

3. おわりに——中国における記念：メディアはいかに災害を叙述するのか

中国において、共産党の成立発展と緊密に関係する事件・人物および関連の祝日についての記念は多い。災害の記念は日常的ではないにしても、慣習的に「祝祭のような」記念式が行われてきた。2008年四川省地震の周年祭に、「慰問団体、検査団体、旅行団体」が被災地に殺到し、元々厳かであるべき所に、大喜びの様子が現出した」という記念の形も指摘されている（王 2009）。唐山地震の周年記念の際に、伝統メディアは「困難克服」というプラス面の精神を前面にして、復興の成果、特に都市建設を記念日の内容として取り扱ってきた。唐山は「鳳凰涅槃」の「新型都市」¹⁹であり、「抗震精神」を持っている唐山の人々は「地震の災害を打ち勝ち、未見の新生活を過ごしている」²⁰、と報道された。終戦記念日の八月十五日が、「メディアが築き上げた結果」（佐藤 2005：27）であるという佐藤卓己の指摘と同じく、記念の過程において、唐山地震から「抗震精神」まで、さらに「中国夢」までの変容は、事実と記憶が次第に薄れていくなか、メディアによって次第に抽象的共同体の存在が強調されるようになっていく。

伝統メディアが唐山地震を「抗震精神」という言葉によって抽象化した一方、ネットメディアは基本的には「哀悼」「弔い」を基調として、体験者の記憶などの細部の事実注目し、「口述」などの方式で記念の主体——被災の記憶、救援・復興の過程などを表現した。映画も、災害がもたらした傷を現代の人々に蘇らせ、架空のストーリーではなく、百万人の被災者の記憶として現代人に提起したものと考えられよう。以上のように、「個別の記憶の復活」が図られるようになり、新たな「集合的記憶」が形成される可能性も生まれてきた。

しかしながら、阪神淡路大震災や東日本大震災の震災の直後および周年報道に呈示された数多くの反省、体制への批判、避難・防災教育（松井 2012：15）などと比べ、中国のメディアは記憶の忘却に抗っているものの、その経験をいかに「生かす」のかということは未だ追究できていないと思われる。

補注

¹ アルバックスは「集合的記憶は空間においても時間においても集団に支えられている」と論じる。本報告が検討しているのは、メディアという集団が再構築された唐山地震についての「集合的記憶」である。（アルバックス 1999：96）

² 中国における「地震社会学」の発端は1979年に王子平により開始された。彼は唐山地震に基づき、関連の著作を三つ完成し、地震社会学の理論的内容を充実した。（顧・鄒・毛 2000年）

³ 小学校と中学校の教材に、唐山地震についての内容がない。「1966年の邢台地震（M6.8）」についての内容はあるが、周恩来総理の慰問を主要内容として掲載されている

⁴ 『地震中の父と子』人民教育出版社語文教科書五年級上冊第17課

⁵ 『中国救援隊、真棒！』人民教育出版社語文教科書三年級下冊第28課

⁶ 記事キーワードは1986年、1996年、2006年、2016年の7月28日前後の唐山地震の特別報道に基づいて整理したものである。

⁷ 汝安「鳳凰再生之地——尋訪唐山地震遺跡」『人民日報』1986年7月28日

⁸ 訳文は本報告者によるものである。田俊榮・費偉偉「磨礪廿載起宏図」『人民日報』1996年7月26日

- 9 徐国強「地震記念碑（詩歌）」『人民日報』1986年7月28日
- 10 石徳連・徐建中「唐山集会隆重記念抗震十周年」『人民日報』1986年7月29日
- 11 梁志忠「弘揚「抗震精神」」『人民日報』1996年7月23日
- 12 防災減災の報道内容は具体的な行動指示と教育が少なく、多くのは防災講座の宣伝である
- 13 「胡锦涛在全国抗震救灾总结表彰大会上的讲话全文」中華人民共和国中央人民政府网、2008年10月8日
http://www.gov.cn/dhd/2008-10/08/content_1115568.htm
- 14 人間は努力すれば、すべての困難が克服できるという中国伝統的「自然観」は毛沢東時代の「マルクス主義」の影響で、「意識的決定性作用」になったのである。——徐倫臣（1997）「毛沢東“意識的決定作用”和“平均主義”思想的歷史文化溯源」『理論探討』（4）pp.19-22
- 15 杜尚沢・徐運平「弘揚抗震精神、為中國夢注入強大精神力量」『人民日報』、2016年7月30日
習近平は「地震災害と戦う過程の中に、唐山の人民は「公而忘私」「患難与共」「百折不撓」「勇往直前」という抗震精神を錬磨しました。これは中華民族精神の重要な体现です。我々はこのような精神を高揚し、小康社会という目標を全面的に達成、中華民族の偉大な復興を実現するための中国夢に、強大な精神パワーを注ぎます。」
- 16 黄帥「災難記憶如何進入歷史敘述」『中国青年報』2016年7月29日
- 17 新聞紙の宣伝方針によるより充実した内容である。
- 18 彦萍：記念唐山大地震四十周年——経歴者口述 http://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_26620
- 19 田俊栄・費偉偉「磨礪廿載起宏図」『人民日報』1996年7月26日
- 20 李文永「唐山之歌——唐山大地震二十周年抒懷」『人民日報』1996年7月27日

参考文献

- 湛旭彬（2016）「唐山大地震40周年：时代朝前走」『短史记』第526期、9月20日
<http://view.news.qq.com/original/legacyintouch/d526.html>
- 顧建華・鄒其嘉・毛国敏（2000）「地震社会学進展綜述」『國際地震動態』No.1、pp.14-25
- 胡国勝（2008）「建国以来中国共產党的記念活動研究」『党史研究与教学』第1期、pp.32-42
- 胡百精（2014）「互聯網与集体記憶構建」『中国高校社会科学』（3）、pp.98-106
- 姜尚中（1999）「記憶」『社会情報学IIメディア』東京大学出版会、pp.58-59
- 李文海等編（2000）『清史編年第二卷（康熙朝）上』中華人民大学出版社、pp.47-48
- 林山・白洋・黄舒媛・黄敏瑜（2010）「論突发性災難中媒体传播社会信息的方法和責任」『山东省農業管理干部学院学报』26（1）、pp.92-94
- 劉一平（2001）「試論九十年代中国災難報道機制」『新聞大学』（1）、pp.45-47
- 馬宗晋、高慶華（2010）「中国自然災害綜合研究60年」『中国人口・資源与環境』第20卷、第5期、pp.1-5
- 松井一洋（2012）「雜誌『新聞研究』における阪神淡路大震災後と東日本大震災後の論説の比較」『広島經濟大学研究論集』第34卷第4号、pp.13-28
- 佐藤卓己（2005）『八月十五日的神話——終戦記念日のメディア学』ちくま新書、pp.27
- 王龍（2009）「我们應該怎樣記念災難？」『政工研究動態』（10）
- 王漢生、劉亜秋（2006）「社会記憶及其建構——一項關於知青集体記憶的研究」『社会』3、第26卷、pp.46-68
- 王曉葵（2007）「唐山大地震における追悼と記念」『愛知県立大学外国語部紀要第39号（地域研究・國際学編）』、pp.125-147
- 王曉葵（2008）「国家権力、喪葬習俗与公共記憶空間——以唐山大地震殉難者的埋葬与祭祀為例」『民俗研究』第2期、pp.5-25
- 吳綺雯（2006）「論毛泽东“人定胜天”的环境思想」『涪陵师范学院学报』第22卷、第5期、pp.120-124
- 夏明方（2015）「災難記憶与政治話語的變遷——以文史資料中的災害記述為中心」『中華讀書報』pp.13
- 薛亜利（2010）「慶典：集体記憶和社会認同」『中国農業大学学报：社会科学版』第27卷第2期、pp.63-71
- 張百新・王洪峰・張共可（2016）「回望40年，唐山大地震給世界带来了什么」『新華每日電訊』4版、7月28日
- 中華人民共和國國務院新聞（報道）弁公室（2009）『中国的減災行動』
- 周海燕（2014）「媒体与集体記憶研究：檢討与反思」『新聞与传播』9期、pp.39-50
- 鄒贊（2012）「歷史記憶的重構与書写——以《唐山大地震》為例」『名作欣賞：文学研究旬刊』24、pp.148-149